

月報

109号

発行所

青丘文庫

編集・発行★青丘文庫
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1
メゾンド青丘ビル2F
TEL (078) 734-5989
FAX (078) 735-0868

労働運動史研究と労働史研究

高木 伸夫

労働者の闘いが高揚していた一九二〇～三〇年代から、労働運動史研究は一定の研究蓄積があるが、昨今は労働組合運動そのものが低調であることも手伝って、関心と呼ばなくなっている。アナル派が提唱する所謂「社会史」研究は、マルクス主義・実証主義研究を否定することから始まり、我が国でも広範な読者を獲得したが、究極的には地域史研究と捉えてもよいだろう。

そうだとすれば、方法論では異論はあるが、「社会史」をマルクス主義・実証主義の観点から深めることは出来ないものだろうか。

在日朝鮮人運動史研究でも、この数年、若い世代が登場し、これまでになく視点から研究を深めようとしている。例えば、運動史研究という「狭い視点」のみでなく、コミュニティという視点、言い換えれば単に左翼運動団体の盛衰、抵抗史のみでなく「在日朝鮮人という視点」から運動総体を捉え直すという研究も発表されている。

このような方法は、社会運動の果たしてきた成果を見ようとしめない机の上から見た観念論―学生運動すら経験していない世代では、社会運動そのものを

どう捉えたらいいのか理解し難いのかも知れない。このような状況が続けば、「労働運動史」という学問は死滅するかも知れない―という酷評は直に出てくるが、我々が「運動史研究」という狭い世界に安住していたことに對する、痛烈な問い返しでもあることに反省する必要がある。

また、「運動史研究」はこれまで専ら官憲史料を引用してきており、地域資料の掘り起こしが遅れていた。大原社会問題研究所蔵文書や新聞史料が官憲史料を補充するものとして使われてきたが、地域史料はなかなか残らないものとして関心と呼んではなかった。「××運動史」や「〇〇市」などの自治体史、運動史の執筆者のみが特権的に地域史料を見ていたが、これらは自治体史が終了した時点でも史料館などで全ての文書を公開すべきであろう。また、行政史料だけでなく、史料館が保管する文書はこれまで十分利用されていないのではないか。

例えば、尼崎市立地域研究史料館が保管する「△家文書」にも戦時動員に関する研究者未見の史料が存在する。量は少ないが、「地域史研究」という枠の中で、―在日朝鮮人史研究という「狭い枠」を取り払い―地域の中の朝鮮人像或は運動史という研究視点こそが、これから求められているのではないだろうか。

「高槻地下倉庫」工事と労働力動員

在日朝鮮人史研究会

— 戦時期建設業における朝鮮人労働者の性格をめぐって —

'96.4.14

坂本 悠一

「高槻地下倉庫」（略称で「タチソ」）とは、日本陸軍が太平洋戦争末期の1944年秋に大阪府高槻市において着工し、翌年8月の敗戦時にはその一部が航空機のエンジン工場（未稼働）となっていた地下軍事施設である。乏しい資料によって判明するタチソ工事の労働力動員の特徴は、①朝鮮人労働者のほかに兵士、住民、学徒など多様な労働力が動員されたこと。②隧道工事という最も基幹的な作業に従事し、かつ量的にも多数を占めたのが朝鮮人労働者であり、その総数は約3500人（USSBS報告書・家族を含み実数は3000人程度）と推定される。③朝鮮人労働者のうち、工事の主力となったのは日本に既住していたいわゆる「自由労務者」で、戦時労務動員による「集団移入」者は量的にも質的にも彼ら以上の役割を担ったとは考えられないこと、である。

「自由労務者」の中核となったのは、従来から各建設会社の配下にあって各種の土木工事に従事していた下請ないし孫請業者の雇用するかなり熟練した土木労働者であったと考えられる。移民労働者としての在日朝鮮人労働者の「三大職種」のひとつとされる「土工夫」は、「坑夫」「職工」に比べて「全国的な普遍性をもつ職種」であったが、昭和恐慌期には他の職種への就労が減少ないし停滞するなかで、失業対策事業による土木職域への進出、日本人労働者の軍需工業領域への移動などをつうじて、そのウェイトをいっそう高めていった。こうして、朝鮮人土木労働者はある程度の熟練を身につけた技能労働者として建設産業に定着していき、またこれら労働者出身で、朝鮮人労働者を抱えて下請・孫請的な工事請負に従事する朝鮮人親方も相当数存在するようになっていたと考えられる。このような植民地労働力依存型の日本の建設労働市場の構造的な特色は、戦時期に入って日本人労働者の徴兵によっていっそう強化されていった。全国建設労働市場の約半数を占めた大手44業者の雇用者（建築・土木両部門）についてみると、戦時労務動員が開始される39年の時点で朝鮮人がすでに46%を占めており、44年には過半数の51%に達している。

「労務動員計画」による朝鮮人労働者の日本国内への「集団移入」では、土建部門にも終戦時までには総数のおよそ15%、合計約10万人が動員された。しかし、建設労働者に占める朝鮮人労働者の高比率は、これらの「集団移入」労働者の増加が主たる要因となってもたらされたものではない。「集団移入」により土建業に動員された朝鮮人労働者のうちで終戦＝解放まで「集団移入」者として管理されていたのは約3万5000人とされるが、これは朝鮮人建設就業者の推定総数約40万人の10%以下である。これらの「集団移入」者の建設労働者としての熟練度は、既住の「自由労務者」には到底及ばず、軍土木工事の中核的工程であった隧道作業の熟練的な職種を担うことは困難であったと考えられる。

以上のような戦時期の建設業における朝鮮人労働者の位置からみて、タチソのような国内軍工事の労働力動員においては、朝鮮から「集団移入」されたいわゆる「強制連行」者がその中心であったと考えることはできない。したがって、各地の「強制連行」調査やマスコミの報道などで当然視されている<軍工事＝朝鮮人労働者＝「強制連行」>という図式は根本的に再検討されなければならない。

対立と統合の「鮮満」関係

田中隆一

論文要旨

「満州国」治外法権撤廃に際しての在満朝鮮人教育行政権委譲問題をめぐる朝鮮総督府と「満州国」（関東軍）との交渉過程において噴出した、「五族協和」と「内鮮一体」という二つの植民地支配イデオロギーの相剋とは、「満州国」国籍法を制定して在満朝鮮人を「満州国民」として取り扱おうとする「満州国」側と、在満朝鮮人を「日本国臣民」として自らの管轄対象とする朝鮮総督府の確執であった。結局、当該交渉過程においては、満鉄沿線主要地を除く在満朝鮮人教育行政権を「満州国」に委譲する、という事務レベルでの調整により妥結をみたものの、在満朝鮮人の国籍問題、及び「内鮮一体」と「五族協和」の間の矛盾は根本的な解決をみなかった。

また、朝鮮産業経済調査会においては、「満州国」の重化学工業化にともなう朝鮮工業の対「満」貿易衰退の潜在的可能性に対する不安を背景に「満州国」関税改正論議がなされた。その結果、「満州国」の財政収入を考慮しつつ第四次関税改正の実施を見、以後も朝鮮の対「満」貿易は伸張し続けた。このように内部に対立的要因を孕みつつ「鮮満」間の経済的利害の調整が図られたことが、当時「鮮満一如」といわれたものの内実であった。こうした「鮮満」関係は、盧溝橋事件を契機とする日中全面戦争、さらにはアジア・太平洋戦争の展開のなかで、戦時統合へと変容せしめられることになった。「内鮮一体」と「五族協和」という植民地支配イデオロギーの確執は、「内鮮一体」の「満州国における確立」という形で決着を見た。また関税政策にみられる「鮮満一如」の経済統合については、戦時輸送力の強化に資すべく、「鮮満」間の保税運送制度や通関手続の簡捷化などにより、財政収入を考慮しながらも、結果的に「日満関税の実質的撤廃」が実施された。

いうまでもなく、「満州国」は傀儡国家であった。しかしそれ故にこそ、対外的には独立国家であることをアピールする必要があった。そのため、塘沽停戦協定から盧溝橋事件までの相対的安定期においては、「鮮満一如」の経済統合の進展に比して、植民地朝鮮と「満州国」の政治統合は、「五族協和」と「内鮮一体」の相剋にみられるように、抑制的なものであった。両者の政治統合が加速するのは、日中全面戦争からアジア・太平洋戦争に至る軍事的契機を媒介としてであり、それはむきだしの戦時統合として実現した。しかしそれは同時に、独立国家であるはずの「満州国」が名実ともに自己破産する過程でもあったのである。

新図書案内

各司膳録 (56～71)	國史編纂委員会	1993
我的青春	高哲他	東北朝鮮民族教育出版社
中国朝鮮族伏劣性研究		延辺人民出版社
東北軍政大学吉林分校		遼寧民族出版社
渤海史研究 (一)～(四)		延辺大学出版
百済仏教文化の研究	忠南大学百済研究院	1994
國史館論叢 第31～40	國史編纂委員会	
韓国独立運動史 資料10～15	國史編纂委員会	
韓国独立運動史 資料21	國史編纂委員会	
駐韓日本公使館記録 7	國史編纂委員会	
駐韓日本公使館記録 24～30	國史編纂委員会	
中國正史朝鮮伝 譚註一～四	國史編纂委員会	
國譚備辺司膳録 7、8	國史編纂委員会	
対馬宗教関係文書一書契目録集2一	國史編纂委員会	
韓国史料叢書27、30、35	國史編纂委員会	

研究会御案内

合同研究会

1996年5月19日(日)

★相談会

時間

午後1時半より

「青丘文庫の今後についての報告と研究会
の維持について話合いますので必ず全員
出席の事を望みます。」

★朝鮮民族運動史研究会

第152回例会

時間

午後3時半より

報告者 金基旺氏

テーマ 「1910～1920年代の留学生問題」

*場所はいづれも青丘文庫にて